明治文庫

第五回

圍碁の輸贏に時をうつし。空腹たる折かれば客もあるに逸早く。醉て佳興に入しかば時こそ來れと正左衞門ハ。四方山の話の序に人ハ貴賤の差別なく。年未だ若き頃おひハ戀ゆゑに身を苦しめて。可咲しき事のある由を。我躬の上をもほのめかして語れば和尚ハうち笑ひ和一速水さんハ如何なすつらん例よりい口輕よ。出家の耳

柳亭種彦編次

よハ聞憎い面白い事を仰しやるお坊主だとても男もれば。昔ハ隨分面白い馬鹿氣な事もたゝましなが。承まハれれば速水さんハ。未だ御獨身ださうだから。吉原ろ品川ろ。乃至ハ近所の切店なんぞよ。御馴染が澤山よ嘸有ますでござりませう。と問れて此方ハ好い潮と盃を置。膝をすゝめて正「箇様よ申ましたら何だろ惚言の様で恐入るが。實ハ北廓の松葉屋の店で。當時筆頭だとろ何といふ常磐といふ妓よ久しく馴染て通つてゐるうち。女郎買の金よは誰しも詰る做ひで。いよ〳〵城が保ち兼此春もろ〳〵大敗北。底で極内〳〵なお耻ゐしい話しだが。實ハ間近に成た更衣に紋付の袷から夏物ハ總て質入をしたり。賣拂つたりしてたゝまひ。差換の大小まで手許にハない始末ゆゑ。先方の婦人も着のみ着の儘と成て。是も勤めてハゐられぬといふ大困難で。頻に吾輩へ逼る處が如何しやうにも首の振方が付ない騒だが。偖ろんからと云て打捨て置た日にハ吾輩が獨の身を苦しめるだけハ。身から出た錆と諦らめてもゐますが。若茶屋や船宿などから。重役の

方へでも訴へられると。押込にされるか暇に成か。二ッ一ッの大騒動だが。是迄も諸方を借盡した挙句ゆゑ。同察や朋友に如何ろして呉ろと頼むだとて。相手よ成て憫然むでくれる人もなし。實よ此物まへよハ進退窮まつて能く考へて見ると。三度の食事も快く咽へ通らない程でどざりますが。如何心配しても法方の立ない處から。苦蹠焦よ旦から晩まで酒びゝしよ成て其日〳〵を送つてゐますが。是が何時よ成ば全快しやうといふ目途のない大貧病だから。實の處ハ今日

御寺へ上つゝのハ。少〳〵拝借を願つて一時の處を救つて頂き度とハ存じゝが。偖發言よきまりが惡く先刻ら搓挪してゐまゝゝが。此大難澁の場合をお察し下すつて。何如ぞ當年の暮まで二三十兩程用立てハ下さいますまいろ。然すれば此際を一度奇麗よ濟して。以來ハ謹直よ務向を勵み拝借の所ハ扶持切米のうちから。追〳〵よ返上するやうよ致しますから「それハ至つてお易い御用だ。君とハ御幼年のうちから格別に御懇親よもたゝゝげだし。殊よお年若の事で一

端は誰よりも有うちの事だから。二三十兩位の事なれば寺よ持合せがない迄も何如でも御融通致しませう。遊びの金よは誰しも詰るものだから。證書よもなんよも及ばど今日直よでも御入用ならお持なさい。と粹を通して出家よ似合ぬ。言葉よ速水は却て耻入り正「然う容易く仰しやつて下さいますと。穴へも這入さいやうよ思ひますが。漸の思ひで發言さのを。斯う速よ御承知下すつさので買よ大安心を致しましさ和「今日は如何いふ機會だが。斯な秘密のお話しの出さ

序だらさ。拙僧も君よ一ッ見ておもらひ申さいい品がありますのさ正「お品は何だか存知ませんが。唯見るだけなら易い御用だが。何やら早く出して拜見させて下さいまし和「是も實は些耻入さ極内のお話しだが。今迄此席よ酌をして居さ小姓の華次郎は。十三歳の時から奉公よ參つて可愛がつて養育してやりましさが。今年は既よ十七よも成ますし。是迄も格別目を懸さだけよ善奉公もさまましさから。何時迄も手許へ置て寵愛して却て當人の爲よ成ませねば。爰て元

服させて或る幕臣の株を買て。一家の主人となつてやり度と存じて。大方ハ支度も整へ此ごろ大小の拂物がなるに付て大奮發をして調へてハやりましゝが。偖切るか切ぬゝの所ハ。當人ハ勿論拙僧等ハ皆無分らぬゆゑ。如何ぞ鑒定をして下さらぬか。正「刀劍を見るのハ武士の役目ゆゑ。殊ゑ此道ハ大好でござりますから能ハ眼も届きませんが。左に右拜見いたしましやう。と和尚の居間へ趣きて華次郎に取出させ。帛を採て拵より中具を熟と見終りて。正「是ハ眞に結構〳〵。よい味ひの相州もの拵付で百両以上なら。決して高い物でハござりません。併し切るか切ぬかハ。試驗て見る上でなくれば確とハ申されませんから。種〳〵お世話に相成るお禮かゝく。是を四五日拜借して試しを致して參りませうかね。華「速水様がお試し下されば。同じ頂戴致しあがらも。安心して永く秘藏いたされますから。且那様どうぞお願ひ成って下さいまし。和「汝が然う願ひゝれば。素より汝に買て遣る物だから能いやうにしておく貰ひ申がよい。正「吾輩が確よお

預り申て。何れ近日の間よハ必らず持て來て返上する迄此鈍刀をお預り下さい。と己が差料を取換て暇を告て歸らんとすれば和「速水さん。マア もつと緩りとしておいでなさいな。先刻伺つさ通り種〻御心配もある處だから。今日直にお持なすつてお遣ひなさい。ト金三十兩を紙に包み渡せハ探て押戴き正「何とも恐入ましさがお蔭で危急を凌ぎます。証書ハいらぬと仰しやるれども。お硯を拜借して受取ずとも鳥渡一筆和「イヤ〳〵それハ御無用〳〵。御買直な所を見ぬけばこそ御用立さのだから。御返濟の期限も御都合次第で苦しふどざらぬ。マア〳〵持てお遣ひ下さい正「寔よ千万有がさい大困難を救つて下すつさので。胸が晴〻致しさ故か。大そう愉快よ御酒が進むで十分よ酩酊ましさ和「此勢ひで直よ松葉屋かな正「イヤ〳〵如何致して。大切なお預り物ハなり旁以て今晩ハ眞直よ邸へ歸り。明日よも諸拂ひを濟せれば跡ハ必ず心を入かへ。堅固よ務を勵みますのさ和「然なれば至極重畳だが。未だ〳〵お若い躰だから悉皆止るよも及ば

花の宴
貴と賤
貧士
黄金を借る
吉福院

華次郎
正左衛門

ないが。氣をつめて遊ぶ分よハ浪費もるし。其間よハ眞面目な所ゝ御新造をお迎へで。是非とも堅固ゝ成やうゝまるさるがよからう。正「家内を早く持がよいと勸、めてくれる者も有ますが。何をいふよも只今迄の舉動でハ中〻其場合ゝ至りましゝんだが。是らハ必ず改心して。手堅く務め續きませう。と雀躍て住僧はじめ。華次郎等よも暇を告。寺を出しが快き醉に乘じて寸刻も早く金策の出來る事を。常磐に話して安心させんと。辻に客待つ竹輿を雇ひ。一散走に北里へ趣き。常磐に會ふく眞福院が異議なく金を貸さるハ。案事るより產が安いと世の譬ゝいふ如くゝて大安心をしゝるといふ。始終の話しゝ常磐も共に昨日の辛苦引かへて。今日ハ歡喜の眉を開き更衣の質受より。茶屋其他の會計やら。及遣手等の纏頭まで殘る方なく分ち與へ。面白く夜を更しけり

○第六回

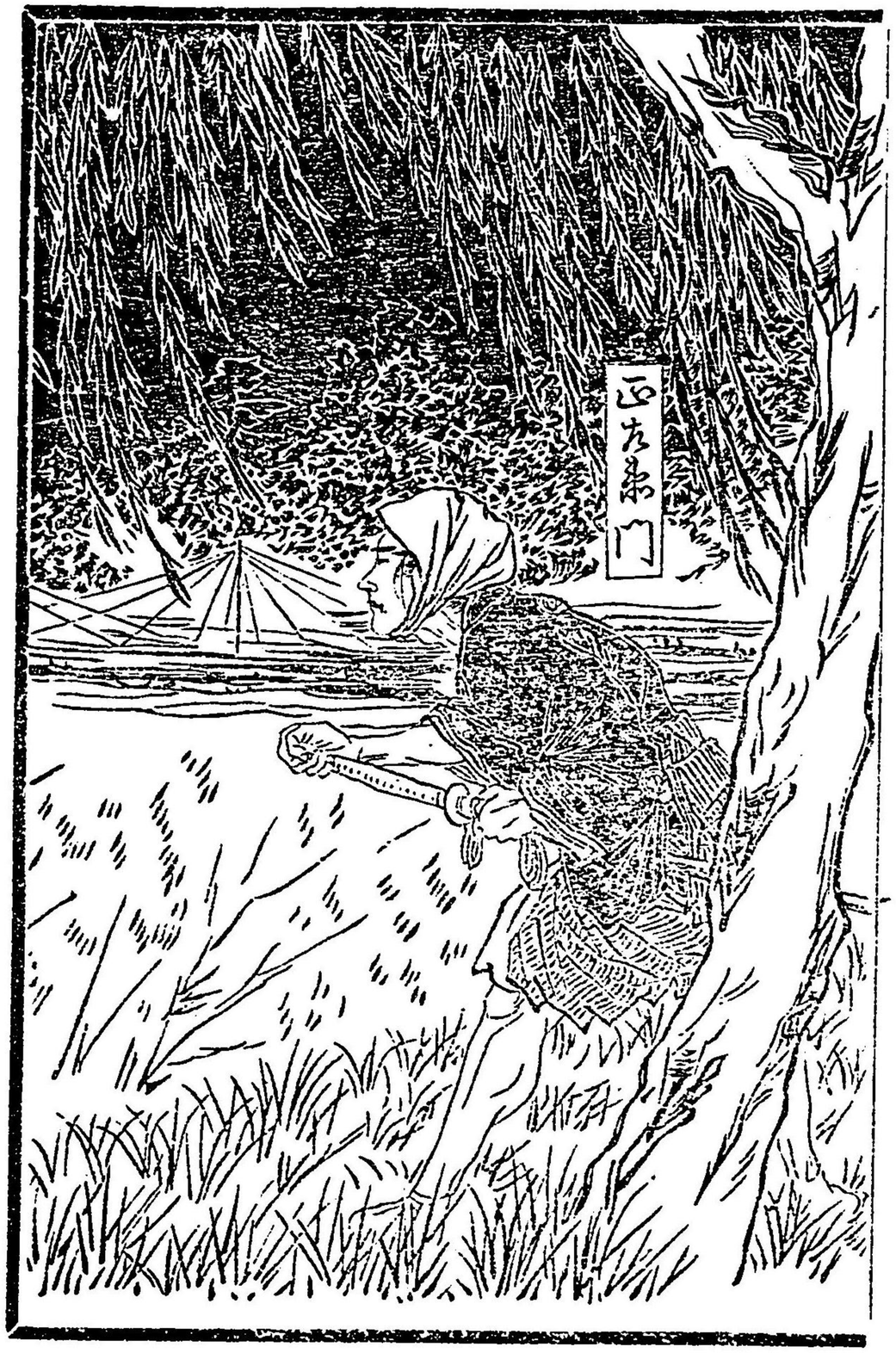
常磐が部屋とハ二階と下。遠く隔さる奥の間の若緑といふ娼妓の部屋へ。引過頃に上りさる客

ハ何方の若殿かと思ふ計りの大若衆。今宵が丁度再會ふれば。馴染金ハいふも更なり。樓中の者へ惣花を蒔散して花美に。座敷を片付閨房に入れば。若緑は務の身なるから他の客にハ立優る男ぶりから金遣ひ。行屆さる情郎なれば嬉しと思ふ情より。惚れば何か耻かしく思ふが戀の慣にて。此に至れば娼婦も生娘も亦異りなき思ひハ同じ彼客も。若緑が行燈に背けし容貌を覗きこみ「貴嬢が私に三ッ年倍だとお言のハ如何も虚言だらうと思ふよ。私等の眼にさへ未だ少女ばなれのしないやうに見えるハ若「アレ何だか氣耻かしいねェ。如何いふ風の吹廻しか五六日前より。不意計當樓へお上りだつて初會の時から。何方の若殿様のお忍び歩行かと思ふるいが。如何かして眞宿ふいと想つて願ひが成就て。吾儕ハ斯ふ嬉しい事ハ有ませんハ。考て見ると嬉し過て何だか氣味の悪い怖いやうな心持ですハ」「オヤ私ハ何も氣味の悪いやうな事ハ思ふない積りだが。私等ハ遊びが極不馴だから。怖いとか氣味が悪いとか思れるやうな事が有かも知れない

が。連と一所よ來るといふ事の出來ふい身分だから。詮方なしに度胸て一人て來るのだが。何も氣味の惡い理はないじゃァないかェ。「若」別段よ是と云て怖い事も畏ろしい事も有ませんが。貴君のやうな立派なお方なら茶屋つきで。幇間か何かも大勢卒てお出でなさるべきじゃァ有ませんか。然を未だ前髪のお有なさる位で唯單身て直接でお上んなさるのさへ訝しいよ萬事よ行屆いておいでなさりながら。初心らしい事を云ておいでだから。氣味が惡いと云ましたのさ。如何ぞ吾儕の胸よ陷るやうに尊家を聞しておくんなさいよ。「成」やど茶屋ら來ないから怪しむ所ハ最もだが。今もいふ通り成さけ世間へ目立ないやうよと連とさへ來ざよ一個て陰密と遊ばなければ成ない躰だから極内て住所も明されないが。何れ其うちよハ自然と分る時節もならふし。必胡亂な者でハないから安心して末長く呼ておくれよ。若「然」う反對よ出られるから叶ハないねェ。吾儕のやうな者でも如何ぞ末長く。と云さいけれども直よ倦られてしまふのさ

客「何故〳〵」若「夫だつても何樓よか馴染か何かゞお有ぁるのだから。今時ぶんよ斯う遅くお出ぁるさるのでせう」客「何さ成さけ早く來さいけれども。其早く來られないといふのも都合の悪い躰ゆゑさ。然し頓て身儘よられる先も見えて來さから。貴嬢の疑ひも今よさらりと解るだらうよ。殊よ今夜などハ如何しても外出られないところだけれども。極氣の悪くなる戯談を聞て堪へられなく成て來さから。夜更の怖さも厭ハたに。竹輿を急がして出て來さのさ」若「眞實に早く身儘に成て。落付てゐられるやうに成さらうねエ。併しお客といふ者ハ如何せ實説の事ハ云ふいろ〳〵當よハ成ないうへよ。貴君のやうな優しい女のやうな情人ぁんぞハ尚の事ト。横の襟へ顔を入て小聲で口籠つていふ」客「何をいふのだろ判然分らないよ」若「分らなくつて僥倖。二度いふと風邪を引ますとさ。ト莞爾とわらふ」客「時よの店の常磐さんといふ倡妓ハ幾于ぐらゐの年齢だエ」若「廿一二でも有ませうねね」客「御膳上等といふ容色りねね」若「大そうお聞紀るさるね

ェ。何だら知らない振をして何時の間よか丘惚をしておいでなるのでハないろェ（空）「知てゐる位なら委しく聞ものろね（若）「夫じやア何故。根穿葉やり聞のだェ（空）「そんな穿鑿ハどうでも宜じやアないろェ（若）「それでも吾儕ハ氣ゝ成ものを（空）「アレ痛い（若）「御免なさいよ（空）「斯なよ痛くして唯御免なさいで濟ものろェ（若）「それじやア。治して上るからもつと膚皮へお寄なはいよ。ト他愛もなき口説の果ハ鴛鴦の衾を重ね。明なば人の目よ立て務の首尾もよからじとて。後朝の名殘ハ盡しなけれど又の逢瀬を契つゝ。笠深く着て面を隱し曉天の星を頂きて大門口を立出ゝり却説速水正左衞門ハ。眞福院より借得る金よて萬事の都合よければ。重荷を下ろしたゝ心地して愉快を極め熟睡し。枕邊よなる土瓶を引よせ醉の水を飲でゐる處へ。廊下バタ〳〵忙がハしく常磐ハ蒲團のうへに上り（常）「正さん寔にお氣の毒だねェ。今夜ハ生憎名代が立込て。徐〳〵話しもしてゐられないのだよ（正）「忙がしいのハ何よりも結構な事でハないか。斯な時に勉強して稼いで


正方糸門

面白き
曉の
枝蛙
大阪
米浪揮毫

置ないと又後の苦しみが想像されるから。此方にハ搆はぬと早く行く勉めなよ帯「やんとうに蒼蠅けれども勉が肝腎だねエ。併し今報さのが寅中刻だから。追〻と順に歸して來てから緩りと睡やう哉正「如何でも宜から早く廻つて來なよ。ト相方の常磐を出し遣りし跡にて。獨倩〻考へれば。眞福院にて酔に乗じ華次郎が大小を試驗てやらんと容易諾に。吾差料と差換て預かつて來さもの丶。藁以て造れる据物なんどを切さハ分にハ確をしさ試驗を遂さとも言難く。政府の

囚獄にて斬首人の有しとき切こそ眞の試驗なれど。ハ大金の費る事にて今の貧なる身にてハならぬ。又何時の日に斬首のなりやなしやも量られねば。長く預り置んより試驗さふりにて其儘に華次郎に返さんか。然る時ハ武士の誓ひし詞も偽にて。巨額の金を快よく貸與へられし住職の依頼を無下にするに似ふて慙に此厄介物を預りさるハ我ながら愚成しと悔れども。又詮方もなかりければ。只管意を苦しむるに。近年諸方に辻切を稱し。往來の者を暗殺して刀を試

験の流行ハ。吉原堤に多〻と聞けど。皆ゐれ寸鐵を佩ざる。町人百姓なんどを殺す勇もなく義も知らぬ跳暴の武士の所業と見えさり。我ハ勇なき舉動にはらで。腕に覺えの有氣なる廊廻ひの武夫を相手に撰びて立向ひ。日頃乃手並を現して辛次郎が大小の切味を試驗るハ。此曉天を過すべからぜ。と思案疾くも定まりければ。遽に思ひ立さる如く手を鳴して常磐を呼べば。廻し部屋より馳來り「何だねェ例にない手を敲いて呼立るゐどの急用でも出來さのかェ。貴君へ先

刻ゆるりと行て來いとお云でハないか正「成ゑど行て來いと云さにハ違ひなひが。其急用といふハ常「如何しさのだェ正「名代の多い晩よ歸らうといふと何だか嫉妬らしいが。實ハ昨夜眞福院で御馳走よ成さとき大そう醉さもものだから。大切な御門の鑑札を坐敷へ忘れて來さが。鑑札がなければ御門を這入ぜ。ト云て夜が明て眞福院へ廻つくゐくハ。屋敷へ歸る時刻が後れていけないから。未だ暗いけれども今から出かけて眞福院の門の開のを待て。鑑札をとつて行うと

思ふから呼だのさ　常「オヤ〳〵夫ハ困つた事をお
たゞねエ御門の札でハ他の品と違つて打捨て
ハ置れないが。御寺へ急度ゐればよいが。若酔て
途中へ遺失ハたなかつたかねエ　正「イヤ〳〵夫ハ心
配ハない。和尚と碁をうつてゐる時に傍へとつ
て置た紙入の上に慥に乗て置たものを　常「さう
なら宜が。未だ暗いにねエ　正「暗いと淋しいと
で二本指てゐれば平氣なものだ。ト話がからに
支度を整へ松葉屋を出て茶屋の門口をトン〳〵
叩けば。家婢ハ寢惚ふからに立出て　下女「オヤ速水さ

ん何で今時分よお歸りなさるのですエ　正「昨夜
泥酔に成た者だから。大事な品を忘れて來たの
を。今から行て取て來なければならない　下女「オヤ
〳〵それハ大變ですねエ。併し未だ早いから一
服上つていらつしやいナ　正「イヤ〳〵急ぐから上
るまいよ。誰も起すにハ及ばないから。大小を出だ
してくんな　下女「然てどざいますかエ。お腰ハ是で
どざいましたかエ　正「オヽ是だ〳〵。おかミさんが
起たら宜く傳ておくれ　下女「又お近いうちに是非
ねエ　正「二三日うちに必ず來るよ　下女「さよなら御

免なさいまし御機嫌よう。ト潛戸をメて内へ入れば。正左衛門ハ華次郎より預りたる大小を腰にたばさみ。悠〳〵と廊を出て日本堤を這許彼許と徘徊し。天晴筋骨逞しき武士の來れかしと。待乳の山の曉風に戰ぐ柳の下に立て。吉原歸の遊客を夫か是かと狙撃ふうち。淺草寺の卯刻の鐘水田に澄て響きけり、

正史實傳續いろは文庫第三輯終

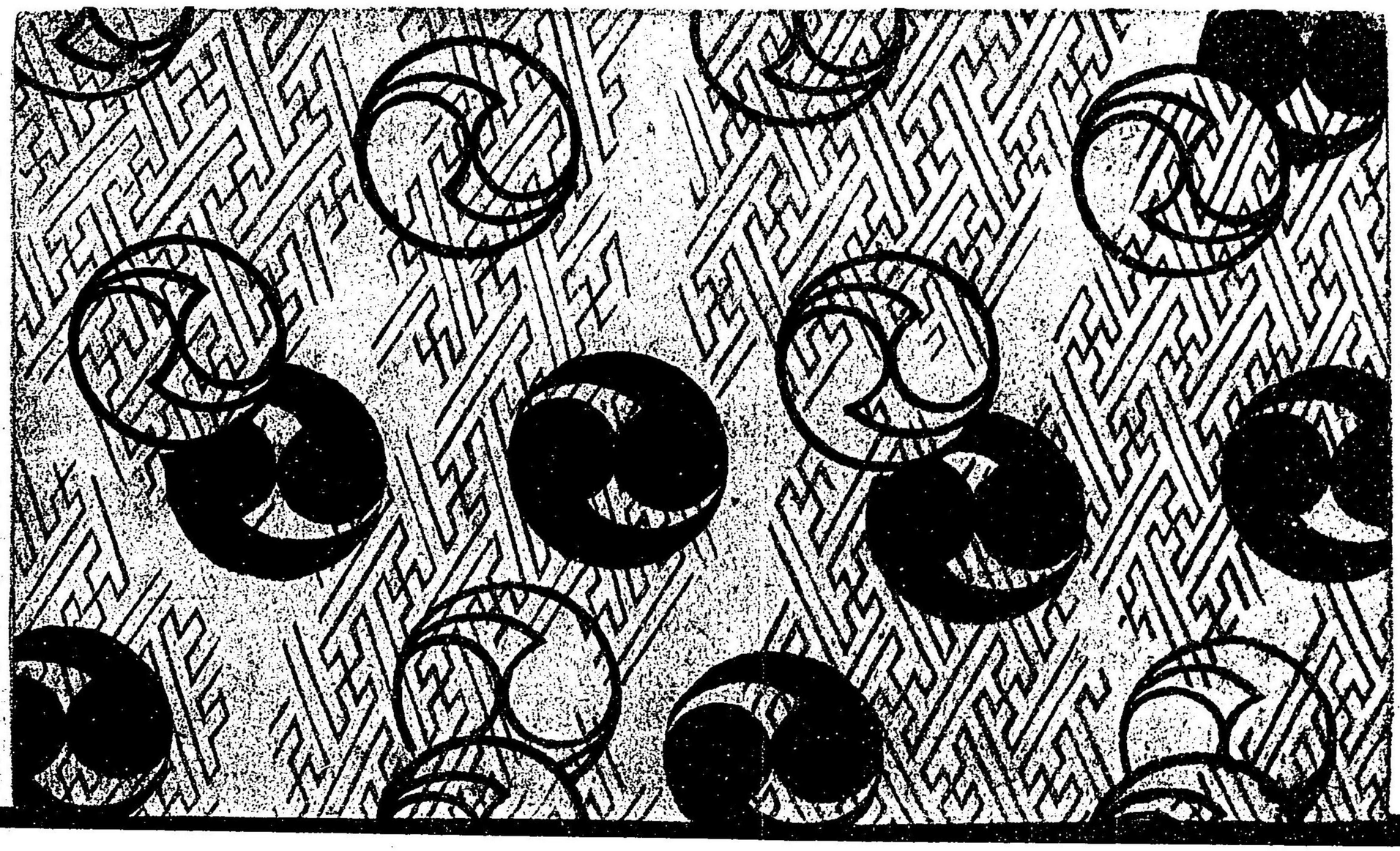
明治十六年六月四日出版御届
同年同月出版

定價金五拾錢

著者 静岡縣士族 柳亭種彦事 高島藍泉 東京京橋區南鍋町三丁目三番地

出版人 愛媛縣平民 片山正義 大阪東區北久太郎町壹丁目七番地寄留

大賣捌 大阪東區北久太郎町壹丁目七番地 梶原支店



特40
579

東京圖書館

和書門	小說類	函	別三架	五九號	三冊